

名古屋SF読書会07ソラリス 2016・11・23

『ソラリス』アウトライン

やって来た男 宇宙船プロメテウス号からカプセルに乗り込み、心理学者クリス・ケルヴィンが惑星ソラリスのステーションに到着する。ステーション内は非常に乱雑で、出迎えない。サイバネティクス学者のスナウトを見つけるが、彼はケルヴィンを見て非常に驚く。ギバリャンは今朝事故で死んだ、1時間後に来てくれとスナウトは告げる。

ソラリス学者たち 自分の部屋に落ち着き、『ソラリスの歴史』を読むケルヴィン。ソラリスは百数十年前に発見された。赤色と青色の二重星を不安定な軌道で回っているため生命は発生しないと思われていたが、どうやら惑星のほとんどを占めるゼリー状の海が軌道を安定させているらしい。深さ百マイル、重さは十七兆トンに及ぶ海は、時空間の特性をシミュレートできるようなのだ。ソラリスの海に関する様々な説が紹介される。ケルヴィンはギバリャンの部屋を訪れ、彼が海にX線照射を行っていたことを知る。誰かが外からドアを開けようとするが、ケルヴィンに妨げられ、そのまま去っていく。

客 スナウトに会いに行く途中、ケルヴィンは黒人女に出会い、驚く。無線室でスナウトと会う。彼によれば、ギバリャンはペルノスタールを自分で注射し、筆筒に隠れて死んでいたと言う。

サルトリウス ケルヴィンはギバリャンの残したメモに従って、ソラリス学年報と『小アポクリファ』を探す。年報の付録によれば、遭難者を探しに行ったベルトンは何かを見て衝撃を受けた。サルトリウスの部屋へ行くケルヴィン。中には入れてくれず、子供らしき人物が中にいる。その後スナウトと会う。倉庫でギバリャンの死体を見つけるが、その横には黒人女が寝ていた。彼は人工衛星の軌道計算をして自分の正気確かめるが、自分の前にも同じことをしていた者がいたことを知る。

ハリー ケルヴィンが朝目覚めると、元妻のハリーがいた。19歳で亡くなってから10年経つ。動揺したケルヴィンはハリーを小型船に押し込み、宇宙へ射出してしまう。その中でハリーは重さ8トンの船を突き動かしていた。

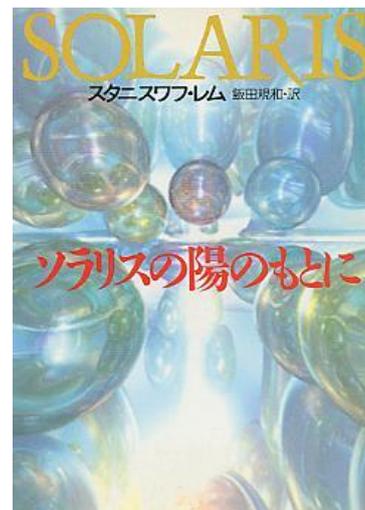
『小アポクリファ』 スナウトと話すケルヴィン。X線照射の10日後に、まずギバリャンのところに、次いで他の人にも「客」が来たと言う。これは異文明とのコンタクトであり、自分たちの怪物のような醜さが拡大されたのだと語るスナウト。ケルヴィンは『小アポクリファ』を読んで、ベルトロンが遭遇したものは4mほどある赤ん坊であったことを知る。遭難者は地球で小さな子供を置き去りにしたことがあったのだ。夜が来てハリーが再び訪れた。

会議 翌朝、ハリーはケルヴィンの姿が見えないためパニックを起こしドアを壊すが、怪我はすぐに治ってしまう。ニュートリノ顕微鏡でハリーの赤血球を見ると、分子の先は何もない。ステーションの3人はテレビ会議を開き、ケルヴィンは「客=幽体F」がニュートリノの凝集体ではないかと言う。

怪物たち 会議を聞いていたハリーは「あなたにはわたしが不要なのね」と言ってケルヴィンと口論する。図書室でソラリス学の書物を読むケルヴィン。「長物」「ミモイド」「対称体」「非対称体」の描写が続く。「客」をロケットで射出したスナウトが来て、サルトリウスの二つの計画を話す。



1977年4月30日文庫初版発行



1992年5月 文庫表紙改訂



2003年5月 文庫表紙改訂

液体酸素 ギバリヤンの講義テープを聞いたハリーは、自分が単なる道具であることに絶望して液体酸素を飲み、自殺を図るが、死ぬことはできない。蘇生したハリーに向かって「ソラリスのために費やした過去の12年間よりも君の方が大事だ」とケルヴィンは語る。

会話 サルトリウスはニュートリノ壊滅装置を作る（『解放』計画）のを止めて、X線照射（『思考』計画）を試みるという。ケルヴィンは、ハリーを連れて出ていく計画をスナウトに話す。ケルヴィンは、ニュートリノ系が崩壊するので無理だろうと言われる。「ぼくは彼女を愛しているんだ」「誰を？ 自分の思い出をじゃないのか」。そう言うスナウトの部屋の戸棚にも「客」が潜んでいた。

思想家たち 翌朝、サルトリウスはケルヴィンの脳波に応じて変調するX線を海に照射する『思考』計画を実施する。図書館で書物を読むケルヴィン。グラヴィンスキーの概説書、グラッテンシュトロームの小冊子（コンタクトの成功はあり得ない）、ムンティウスの『ソラリス学入門』（人々は啓示を待ち望んでいる）、ムンティウスを批判したギバリヤンの論文（コンタクトの成功を信ずる）、ケルヴィンの卒論（感情記録と海の放電の類似を発見）が紹介される。

夢 照射実験が続けられ、ケルヴィンは自分が搜索されているような不思議な夢を見る。実験を止めて15日後、泡の発生、海の燐光、真夜中の叫び声など不思議な現象がいくつか起きる。

成功 サルトリウスの装置は完成し、ハリーはスナウトに頼んで自分に装置を作動させる。ハリーは消滅した。ケルヴィンはスナウトから真相を聞かされ、ハリーからの手紙を受け取る。泡が発生してから「客」はもう来ないと告げるスナウト。スナウトはステーションに残ることを決意する。

古いミモイド 神をめぐる議論を交わすケルヴィンとスナウト。スナウトは「この海は絶望する神の萌芽、発端かもしれない」と語り、ケルヴィンは「欠陥を持った神」の概念を語る。古いミモイドを見つけたケルヴィンはヘリでそこに着陸し、海に手を伸ばす。一週間後、私は「残酷な奇蹟の時代が過ぎ去ったわけではない」という信念を持ち続けていた。

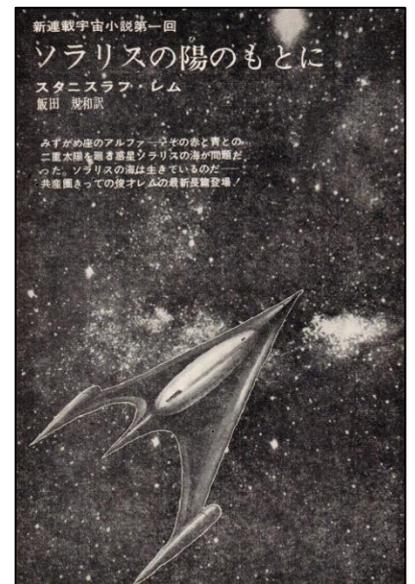
新訳の主な追加部分（上記の下線部分）

- 1 「怪物たち」対称体と非対称体の描写、約9ページ。
p.219, 222~227, 228~229
- 2 「思想家たち」グラッテンシュトロームからケルヴィンの卒論まで、約12ページ。p.318~330
- 3 「夢」海の描写、一番単純な夢の部分、約3ページ。
p.331~332, 336~338

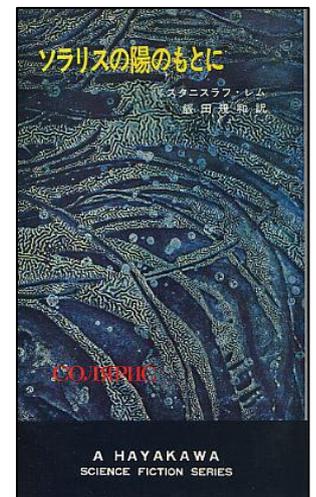
全部で約25ページ。これだけ違っていると、かなり印象が異なってくると思います。特に、思想家たちの追加部分では『ソラリス』のテーマが浮き彫りになってくるので、この部分があるとないとでは、レムの意図（『ソラリス』のテーマは男女の恋愛感情ではなく、人間のイメージには還元できない存在とのコンタクトである）の伝わり具合が異なってくるのではないのでしょうか。対称体の描写、海の描写、夢の描写などもそれぞれ魅力的であり、新訳を読む価値は十分にあると言えるでしょう。（W）



2015年4月新訳文庫版発行
元は2004年9月国書刊行会版



『ソラリス』はまず、SFマガジン1964年10月号～65年2月号に連載され、それからハヤカワSFシリーズの1冊として刊行されました。



1965年7月25日初版発行

コラム①「残酷な奇蹟の時代」

上記以外にも新訳では細かな部分が多数訂正・追加されている。冒頭の宇宙船時間は12時から19時へ、ソラリスの海の重量は百七十億トンから十七兆トンへ、〈悪魔の海〉は〈白痴の海〉へ訂正、黒人女が通り過ぎた後にケルヴィンが思わず匂いを嗅ぐ場面が追加といった具合に、原典により忠実になったと思われる部分が多数あり、大変素晴らしいことなのだが、唯一ひっかかったのが最後の一文。「驚くべき奇蹟の時代」が新訳では「残酷な奇蹟の時代」になっている。「残酷？」と最初は思った。奇蹟とは驚くべきものであって残酷なものではないのではないか。「驚くべき」と「残酷な」ではかなりニュアンスが異なるように感じたのである。「奇蹟の時代」とは、おそらくソラリス研究の初期、コンタクトが可能だと思われて多くの接触が行われた頃のことだろう。多くの犠牲者が出たと作中で語られているので「残酷な」という表現もわからなくはない。それではなぜ旧訳では「驚くべき」になっているのか、少し気になったので、手持ちのドイツ語版を参照してみた（ポーランド語版は『ピルクス』しか持っていないし、そもそもポーランド語はわからない）。「極端に律儀なドイツ語訳」と沼野先生も解説で述べておられるので、これでちょっとでもわかるのではと期待する。気になる結末はこうなっていた。

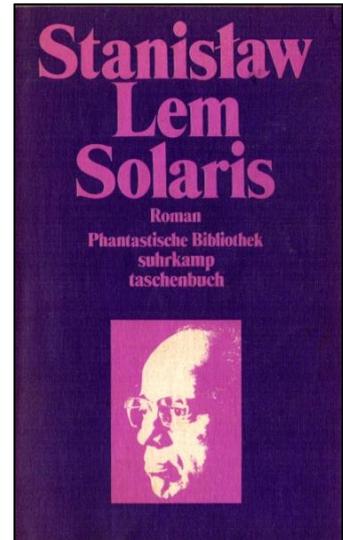
und so verharrte ich im unterschütterlichen Glauben, die Zeit der grausamen Wunder sei noch nicht um.

Zeit は時間、Wunder は英語の Wonder である。grausamen は辞書を引くと「1 残酷な 2 過酷な、(口語) ひどい、ものすごい」とあるので、やはり「残酷な奇蹟の時代」と訳してあることがわかる。もしも元のポーランド語にも「ものすごい」のようなニュアンスがあるとすれば、「残酷な奇蹟」→「ものすごい奇蹟」→「驚くべき奇蹟」という変換がポーランド語→ロシア語→日本語への過程のどこかで生じたのか。または、Wunder に当たるポーランド語にも「奇蹟」でなく「驚異」の意味があれば「残酷な驚異の時代」ともとれるので「驚異」を生かした訳になったのか。結局よくわからない。ポーランド語を勉強しろよという当たり前の結論になるようだ。(W)

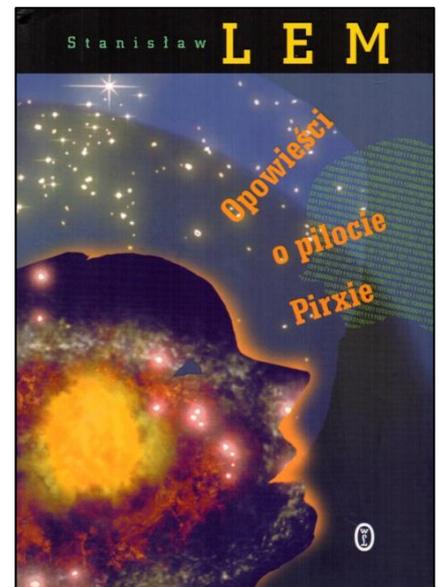
コラム②ソラリス「火星年代記」(1984)



ソラリスは1980年、ハンガリーの大学生が結成したプログレ・ロックバンドである。メンバーがSF好きで、当然レムの『ソラリス』からバンド名はつけられている。当時のハンガリーでは4万枚のセールスを上げ、トップバンドになったというが、バンドはもう1枚のアルバムを残して解散。90年代に復活して2006年まで活動した。肝心の音は、フルートとシンセを前面に押し出したインストもので、演奏も上手く、非常に聞きやすい。よかったら読書のお供にどうぞ。(W)



1980年 ドイツ語版



1999年ポーランド版著作集『宇宙飛行士ピルクス物語』

次回予定 2017年4月29日(土) or 30日(日)

作品『 』

名古屋SF読書会URL <http://www.ne.jp/asahi/science/fiction/dokusyokai/>